千曲の友 Vol.08

交通系サークル らるりんたす 会報誌

今号発行によせて

会報誌『千曲の友 Vol.08』をご覧くださり、ありがとうございます。弊サークル「らるりんたす」は今年の 10 月をもちまして結成 5 周年を迎えることができました。交通系総合サークルを謳っておきながら、飲み物や食べ物の話ばかり本にしたり、シェアサイクル関連のことばかりやったりと相変わらず各個人が好き放題やっているサークルではありますが、5 年もサークルが続いて何らかの活動が行えているのはとてもありがたいことだと感じています。年月を経ればそれだけメンバーも社会の情勢も移り変わっていきますが、これからも「らるりんたす」として同人活動を続けていければ良いなと願っております。読者をはじめ、日々お世話になっている皆様も温かく見守っていただけると幸いです。

らるりんたす代表 三島 慶幸

もくじ

1. 今号発行によせて
2. アシアナ航空 B747 に乗る(いろはす)
3. 日帰りで神津島に行った話(長沢幸雄)
6. 東海ナイスホリデー利島路(三島慶幸)
8. 一般道で名古屋まで帰省した話(コアラ)
10. 高知に残る渡し船～県営渡船龍馬～(福浦喜八)
11. 現実から逃げ、ぬるま湯に浸かる～373 系と下部温泉～(三島慶幸)
12. ごあんない

アシアナ航空　B747 に乗る

アシアナ航空では現在 B747-400 を運用しており、2022 から仁川ー成田便を始めとする日本路線に就航させています。今回は 2023 年 5 月に成田ー仁川間を B747 で往復した際のレポートをまとめました。

成田便の場合、成田 1320 発の OZ101 と仁川 0900 発の OZ102 に入ります。

ゴールデンウィークにもかかわらず往路のエコノミークラスは 30000 円ほどでした。

座席は翼の横を確保。B747-400 ではトリプルスロッテッドフラップを採用しているのでそれがよく見える座席です。日本によくやってくる B747 にはルフトハンザ航空の機体もありますが、こちらは B747-8 で、-8 はフラップが 2 枚の仕様なので、日本でトリプルタイプを見られるのはアシアナ航空だけになります。そもそも旅客営業している B747 は世界で 30 機ほどで、ロシア航空やイラク航空など乗りにくい会社が多いため非常に貴重な機会といえます。

機内食はカツ丼でした。短距離便にちょうどいいサイズ感で、味も申し分ありません。

翌々日の朝 9 時、復路はビジネスクラスで帰ります。B747 といえば 2 階建ての客室ですが、2 階部分はビジネスクラスになっていてエコノミー客は立ち入ることができません。

卵形の断面がわかります。壁の曲線がきついのでまるで小型のプライベートジェットに乗っている気分。ビジネスクラスは 6 万円程度でした。CA さんもオタクが 747 目当てに乗ってくることをわかっているからか、とても優しく色々撮影させてくれました。

片翼 2 発のエンジンもよく見えます。747 自体に乗ったことがなく、いつか 2 階に乗ってみたいと憧れていたのですが、まさか日韓路線でこんなお手軽に乗れるとは…

短距離便でもビジネスクラスではしっかりとした機内食が出ます。今回はプルコギをチョイス。膝掛けまで用意されてさすがビジネスです。味付けも美味しいです。

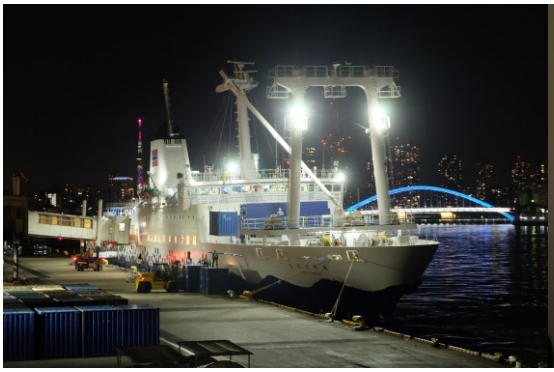
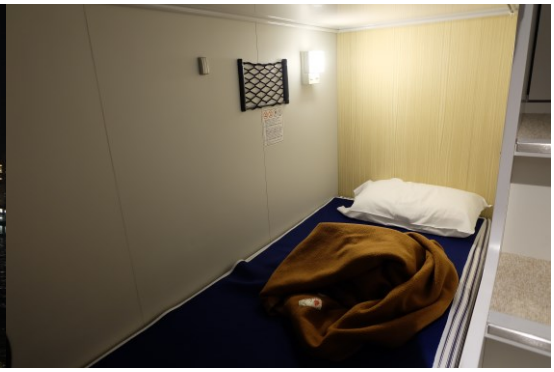
ただ帰りは偏西風もありすぐに着陸体制に。いよいよ成田に着陸というところで、強風の影響でゴーアラウンド。茨城県上空で旋回したのち、再び着陸です。

間も無く引退のアシアナ 747、しばらくは成田便に充てられるようですので、興味のある方はぜひ搭乗してみてください。（筆：いろはす）

日帰りで神津島に行った話

長沢 幸雄

この夏、就航３年目の〈さるびあ丸〉が推進システムの不具合で速力を落としたため、東海汽船の各島航路（竹芝～大島・利島・新島・式根島・神津島）は変則的な運航を余儀なくされました。なかでも３連休中日の７月 16 日出航便は竹芝を出航後、大島すらすっ飛ばして神津島に直航するというぶっ飛んだダイヤ。神津島到着が朝７時 40 分ということでこの機会に夜行日帰りで神津島を訪れることにしました。

〈さるびあ丸〉に乗るのは２度目。今回は特２等を利用しました。最近のフェリーによくあるカプセル寝台で快適です。特にやることもないので出航後ほどなく就寝しました。

翌朝目覚めると、すでに新島沖でした。速度を落としているせいか、思いのほか揺れていてちょっと吐きそうです。寝台に戻り、横になってやり過ごします。気付けば神津島は目の前。デッキに出るや、海の碧さに驚かされました。これが“あいらんぶるー”なのか…!!

定刻よりやや早く７時 30 分ごろ下船しました。ここからはシェアサイクルで島を巡ります。神津島では７月～11 月の期間限定でドコモ・バイクシェアが導入されていました。

入港地が東側の多幸湾だったのでひとまず島を横断して西海岸へ向かいますが、上り坂がめちゃくちゃキツくてシェアサイクルは厳しいなと早くも感じてしまいました。

なんとか山を越えて名組湾にやってきました。ここには石材積出トロッコの軌道跡が残っています。無骨な足場で岩場を跨ぎ、末端部は岩をくりぬいたところに直接枕木を埋め込んでいます。荒々しい海に立ち向かう産業軌道という感じでたまりません。これを見られただけでも満足です。

それにしても雲一つない青空で、照り付ける日差しに汗が吹き出します。ひと通り見終えたところ、そばに木陰のベンチを見つけてひと休み。目の前の海岸には縞模様の石が転がり、絶えず波が打ち寄せます。いつまでも眺めていられるなぁ…

と、始発のバスが到着し、大量の行楽客が赤崎遊歩道に吐き出されました。先に見ておけばよかった…。

海水浴客でにぎわう赤崎遊歩道に突撃する勇気はなく、西海岸を南へ引き返します。途中めいし公園というのを見つけて立ち寄ると、立派なやぐらが立っていて、てっぺんの王座みたいな椅子から海を一望できました。

さらに、温泉保養センターの前を通って沢尻湾に差し掛かれば、ここも綺麗な碧色で思わず足を止めます。神津島の海はどこも夏そのもので突き抜けるような爽快さです。

神津島（前浜）港のポートで一旦自転車を返却。隣の「よっちゃーれセンター」で漬け丼をいただき、土産屋を覗きます。パッションフルーツの寒天ゼリー的なのを見つけて、これはいいなと手に取ると生産地はまさかの鹿児島でした。ちなみに土産屋の前には信号機がありましたが、特に交通量が多いわけではなく、教育目的で設置されているやつですねこれ。

集落を抜け、こんどは「ありま展望台」に来ました。大きな十字架も目を引きますが、なにより目線が高く、眺めが広大。集落も望めて良いですね。

つづいて南の端に位置する千両池を目指します。駐車スペースから続く遊歩道は岩肌を滑り落ちるような道で帰れなくなるかと思いましたが、しばらく下ると眼下にターコイズブルーの入り江が現れました。いやぁこれはすごい。一見の価値ありです。

すっかり満足しましたが、なぜか道はまだ続いています。気になって進んでみると、木製の桟橋が現れ、その先は岩場を下っていました。途中からは鎖すらなくなり、地面に描かれた矢印だけが頼りです。もう最早道ではありません。

ついに入り江の畔まで下りてきてしまいました。遥か下に見下ろしていたのが目の前にあるのはもはや恐怖です。というか、この道（?）今から戻るんですか…???

…帰還しました。しんどかった。生半可な気持ちで訪問するのはおすすめしません。

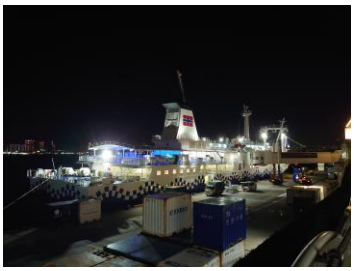
まだまだ見たいスポットはありますが、残念ながら時間切れ。ジェット船で帰ります。さすがに直前の予約では東京まで通しで押さえられず、大島で降りて〈橘丸〉に乗り継ぎました。〈橘丸〉は三八航路（竹芝～三宅島・御蔵島・八丈島）に就航していますが、特に利用者の多い日に限って上りのみ大島に寄港するのです。オープンデッキの右舷側半分が宴会スペースと化しているのにドン引きしつつ、海を眺めていたらあっという間に入港でした。

まさに「海の日」という一日でした。しかし、星空観賞をはじめ、神津島の魅力はまだまだあるといいます。ぜひまた訪れたいです。

東海ナイスホリデー 利島路

三島 慶幸

東京(竹芝)港から往復たったの 4000 円で伊豆諸島の“任意”の島(大島・利島・新島・式根島・神津島)に「さるびあ丸」の夜行日帰りで飛ばされる「ミステリーきっぷ」が東海汽船から発売された。今年の初夏に縁あってさるびあ丸で大島を訪問し、東海汽船と伊豆諸島デビューを果たした私としては、年内に他の伊豆諸島の島々にも足を向けられるまたとない機会であったので、**たまたま土日で予定の空いていた** 12 月 23・24 日を利用し、この「ミステリー」に挑むこととした。



大島は(未踏の場所がまだあるとはいえ)再訪になってしまうし、神津島では日帰り指定がゆえに許される滞在時間が 30 分と短すぎるので、海岸に温泉があるという新島や式根島あたりが面白そうだなと内心希望していたのだが、当日竹芝客船ターミナルの窓口で宣告されたのは自分の中で正直ノーマークだった利島であった。

出航後、横浜寄港を見届けるあたりまで晩酌を取り、ミステリーきっぷ利用者に与えられた二等船室に横たわって睡眠、大島の下船に起こされつつ翌朝 7 時半に到着した。

利島は人口が約 300 人の島だそうで、本来さるびあ丸が寄港する島の中では乗下船者が少ない島であるにもかかわらず、(どういった事情なのかは置いておいて)この日はミステリーきっぷ利用者の中で利島へ割り振られた人が多かったために、人口の半分近い 120 人が島に押し寄せるという大規模上陸作戦のような様相を呈していた。

帰りのさるびあ丸の利島出航時間は 12 時 50 分。与えられた時間は 5 時間強である。地図で確認したところ、都道 228 号「利島一周道路」をメインに、集落と山を挟んで港の反対側となる島の南端の「南ヶ山園地」という広場を経由して島を一周しても 2〜3 時間で戻ってこられそうであったので、まずは島を一周してみることにした。

利島の道を歩きはじめて印象付いたのは、どこを歩いても急勾配であるということと、集落を抜けたあたりからは右を見ても左を見ても綺麗な段々畑状の椿の林が広がっているということである。椿油が伊豆諸島の特産品であることは知っていたのだが、どうやらここ利島はその中でも多くの生産量を誇り、椿の木々が島面積の 8 割を占めているとのことだった。道路際には農業用のモノレールが左右に点在していて、ついついどこ

まで繋がっているか眺めてしまう。

1時間ほど歩き、2回の九十九折りを進んだあたりで地図を確認すると、港からすでに 200 メートル近くの標高を稼いでいることが分かった。どうりで足に負荷を感じるわけだ。ちなみに利島の中央に位置する宮塚山の標高は 507 メートルで、今回目指す南端の園地周辺の標高は 300 メートルほどである。もはやハイキングと言えよう。

9時前、すっと目の前の景色が開け南ヶ山園地に到着した。利島一周ももうあと半周といったところである。園地内にはかつて雨水を貯めることで利島の水源の代わりとなっていた集水シートが展示されており、小さな離島の水事情の苦労をうかがうことができた。

10 時半過ぎ、道を間違えて園地の入口へうっかり戻ってしまうというタイムロスを挟みながらも無事集落に帰還。疲労感の中お土産屋で購入した大島牛乳は格別のおいしさであった。ミステリーきっぷでの来訪者のために特別営業してくれている農協でお土産品を漁り、おしゃれなカフェで休憩を取るともう正午のチャイムが聞こえ、島を離れる時間が迫っていた。最後にヘリポートに立ち寄り東邦航空の「東京愛らんどシャトル」の定期ヘリコプター便が着陸するのを眺め、港に近いカケンマ浜という砂浜で海を感じてからさるびあ丸に乗り込む。朝下船した 120 人かそれ以上の乗客がずらっと乗船を待つ様子は壮観であった。

島を一周して空腹の限界を迎えていたので、部屋の確認も離岸の様子もガン無視してレストランに直行した。にもかかわらず、入店までに 30 分以上待たされる盛況ぶりであった。自分の後ろにも利島乗船組が続々と並び、気づけば下の甲板まで列が伸びていた。ミステリーきっぱー恐るべしである。なお、空腹の上に待たされてから食べたジャンボエビフライカレーがどれだけ旨かったかはあえて言うまでもない。

大島出港後はやることもないので船室でうたた寝をしていると、クリスマスイブということもあって横浜からは 250 組のカップルが乗船してきた。こちらも自前のサンタ帽を被るなどして応戦したものの、イブの雰囲気に撃沈。それでも利島訪問はいいクリスマスプレゼントになった。

一般道で名古屋まで帰省した話

コアラ

多少前の話になるが、ゴールデンウイークに名古屋へ帰省した際、交通費を浮かすためトヨタレンタカーの「片道GO！」を利用した。今回はその時の様子を紹介したい。

午前５時半　東京出発

渋滞を避けるため日の出とともに出発する。ゴールデンウイーク初日ということもあり、前日のうちから各地で渋滞が予想されていた。そのため、午前中の関東脱出を目指しかなり早朝から車を走らせた。さすがにこの時間だと車どおりはまばらで、優雅な旅立ちとなった。

午前８時半　伊勢崎駅着

ここで初めての休憩をとる。いくら乗り心地のよいアルファードを借りたとはいえ、丸３時間も運転し続けると流石に腰が痛む。ロードサイドのマックで軽食をとり、すぐさま北を目指す。ちなみに、今回は中山道を通って名古屋まで向かった。別に東海道を通ってもよかったのだが久々に山を走りたくなったのである。（アルファードは山に向いていない気もするが…）

午前11時　碓氷峠着

伊勢崎から走ること２時間強、車は碓氷峠へと差し掛かった。山を走りたい欲を叶えるべく旧道を選択したのだが、これがなかなかに愉しい道だった。フェンダーミラーとにらめっこしながら峠を走ること20分、車は県境に到着した。カーブがきつく勾配も険しいが、道中の景色と山を越えた時の達成感は何度味わってもやめられない。

午前11時半　軽井沢駅着

ここで渋滞にはまることを見越して早朝に出発したのだが、結局駅前で渋滞にはまってしまった。アウトレットをのぞきながら本日２度目の休憩を軽く済ませ、一路西を目指す。

午前12時　ツルヤ御代田店着

「せっかく長野に来たからにはご当地スーパーへ」ということで御代田のツルヤに立ち寄った。日本酒やリンゴジュース、ドライフルーツなどの特産品からレトルト食品に至るまで、ここのプライベートブランドはどれも美味しくかなり気に入っている。車で来たのをいいことに実家へのお土産を大量に購入し後部座席に詰め込んだ。

午後２時　諏訪大社着

小諸市街の手前で国道18号とお別れし、和田峠を抜けて諏訪へ。小諸と諏訪は鉄道や高速の路線図を見ると遠く感じるが、実際には１時間も走れば着く距離である。せっかくなので諏訪大社でお参りし道中の安全を祈願した。

午後２時半　テンホウ塩尻店

昼ご飯は諏訪地域のご当地チェーン「テンホウ」に立ち寄った。名物のタンタンメンと餃子を注文したのだが、どちらもスパイスが効いていてとても美味しい。是非ともまた食べに行きたい味だった。

食後はいよいよ木曽路に差し掛かる。ここから名古屋までは真っ直ぐ下っていくのみ。特に間違えるような道もないためか、カーナビには175km直進の文字が躍っていた。

午後４時　奈良井宿着

エンブレのうなりを味わいつつ淡々と山を下っていく。トラックばかりが走っている上に、一般道とは思えないほどスイスイと流れていて、「木曽高速」の呼び名も納得の道であった。

そんな道を流すこと１時間、車は奈良井に到着した。木曽路には多くの宿場町が歴史的建造物とともに残されていることで有名だが、ここ奈良井もそんな宿場町の一つである。

実際に街を歩いてみると、確かに味のある建物が並んでおり、とても良い雰囲気である。東京からの日帰り旅行が厳しいため、これまであまり訪れたことはなかったのだが、いつかゆっくりと観光したいものである。

午後８時　名古屋着

奈良井をでて木曽福島、中津川を過ぎると、車はいよいよ名古屋圏にさしかかる。中津川の辺りで日が暮れてしまったのだが、山越えの区間が明るかったのはかなり幸運だったといえるだろう。対向車が多いとは言え、薄暗い山道を夜に一人で走るのはやはり心細い。

これといって観光したいところもなかったので淡々と名古屋を目指し、奈良井から４時間ほどで市内に到着した。

おわりに

約300kmも走った割には、思っていたほど疲れなったというのが実際に走ってみての感想である。（山越えのためか数日後に強烈な筋肉痛に襲われたが、致し方がないだろう。）

新幹線や飛行機で帰省すれば、座っているだけで目的地に着くのだろうが、道中で気になった場所に寄ることが出来るのは、一般道の旅ならではである。また費用面についても、車代と燃料代を合わせて8000円と、この時期の移動手段としては安い方である。

もしよろしければ皆さんも、一般道で帰省してみてはいかがだろうか。

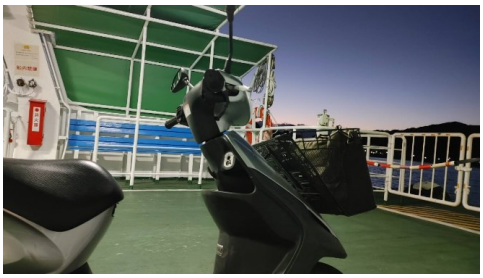
高知に残る渡し船―県営渡船龍馬―

福浦喜八

かつては大阪からのさんふらわあや大分・佐伯への宿毛フェリーなどが運航されていた高知県だが、2018 年に宿毛フェリーが突如運航を休止して以降県外に船を利用して出ることができなくなっている。一方で湾内や島を結ぶ航路は少ないながら残っている。今回はその中でも県庁所在地である高知市内で運航している通称「種崎渡船」に乗船してみることにした。

高知市にはちょうど真ん中の部分に浦戸湾が入り込んでおり、高知駅から路面電車でまっすぐ進むと高知港に行きつくようになっている。今回向かう種崎は湾沿いに桂浜方面へ進むとある小さな港町といったところで、市内唯一の海水浴場があったりもする。1972 年に航路とほぼ同じ部分を浦戸大橋が結ぶも、有料だったこともあり 2002 年までは乗用車の航送もおこなっていたようである。

乗船したのは 17:40 の便。船着場のすぐそこにはバス停があり、ちょうどバスが折り返すところだったが乗下車ともになし。17:35 には船が到着したが、津波対策のための大きな防波堤が待ちうけており姿を窺い知ることはできなかった。この日は原付を利用して訪れていたため、押しながら乗船。係員は 2 人いるようだが結局乗客は自分 1 人だけだった。



乗船時間は 5 分。自動放送なども流れ通常時には乗客がいそうな雰囲気を漂わせる。実際に小学生などが通学で利用する、四国八十八か所巡りをしているお遍路さんが渡る、といった需要があるそう。浦戸大橋ができたものの、当時のさんふらわあなどが通れる高さにしなければならず急な坂、そして狭い歩道と人や自転車が通るには厳しくまだまだ使う人は多そう。昔はさらに近くを市営渡船が走っていたというのだから驚き。

17:45、定刻通り長浜の梶ヶ浦渡船場に到着。折り返しは 18 時だからもしかしたら乗客がこの後来るかもしれないが、ひとまず帰路につくことにする。

現実から逃げ、ぬるま湯に浸かる
～三七三系と下部温泉～

朝の八時二〇分、爆睡していたグリーン車の二階から滑り落ちるように熱海駅へと降り立った。四日後の大晦日、あるいは年明けまでにやらなければいけないことが沢山残っているのだが、どうにもやる気が湧かないので、熱海駅から一日一本だけ運行する三七三系充当の普通列車に乗りつつ、身延線の沿線を散策して東京へ帰ってくるような日帰り旅をして、現実から目を逸らすことにした。

熱海から丹那トンネルを越えた三七三系の普通列車は沼津ですぐに終着となってしまう。ここから素直に富士駅まで移動して身延線に乗り換えても面白くないので、途中の東田子の浦駅で下車し、徒歩と岳南電車を利用して吉原中央駅(バスターミナル)へ、そこから富士宮方面へ向かうバスで身延線の沿線へと出ることにした。案の定富士インター周辺で渋滞に引っ掛かりバスが遅れ、最も近いバス停から身延線の入山瀬の駅まで走って、西富士宮行きの普通列車に駆け込むこととなった。

西富士宮駅から次の沼久保駅方面へ三〇分ほど歩くと、富士山と三七三系が良く映るポイントがあるというので散策し撮影してみたのだが、冬の澄み渡った空といった青さが今日はなく、また富士山の冠雪の具合も微妙であった。せっかく歩いてきたのにという不完全燃焼さは否めないが、所詮は現実逃避の気まぐれ移動。そのまま沼久保駅まで進み、身延方面へ北上する。

身延線に乗ってからやることなどは決めていなかったが、せっかくの現実逃避なのにさっさと帰っても意味がないので、身延のやや北に位置する下部温泉郷の温泉旅館を日帰り利用することにした。今回お邪魔してみた「不二ホテル」の源泉は二十八度と低温なのが特徴的で、浴室内には加温された浴槽とそのままの浴槽があり、そのままの方は「ぬるま湯」気分でつい長い時間入ってしまった。なお外にはその源泉を掛け流しにした露天があったのだが、年の瀬の野外にそんな温度の湯を貯めたところでそれはもうただの池である。ここは夏場に楽しむのが正解なのだろう。

朝の熱海から沼津だけでは三七三系に乗り足りないのは明らか。身延まで戻って「みのぶまんじゅう」と少々の酒を買い、甲府まで特急ふじかわに乗車し、身延線を後にした。【三島 慶幸】

C103 にて「JR 東海 373 系充当列車全時刻表」を刊行いたしました。こんな現実逃避のお供にいかかでしょうか(宣伝になっているのか…？)

ごあんない

◆「らるりんたす」とは…

らるりんたすの名はインドネシア語で「交通」を意味する“Lalu Lintas”に由来します。当サークルでは鉄道から路線バス・船、はてはシェアサイクルまで、ありとあらゆる交通関連の事物を扱っています。

◆各種サイト・関連 SNS

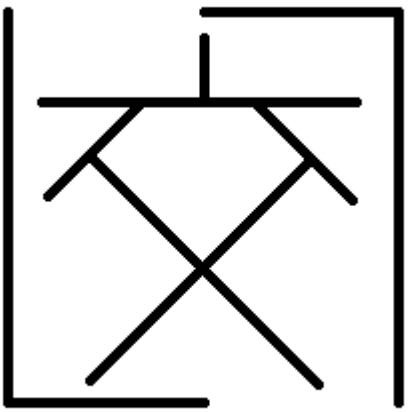
・らるりんたす 公式 Web サイト

本会に関する各種情報を載せています。また、サイト内コンテンツとして公式ブログを用意しており、各種告知の他、メンバーが思い思いの記事を執筆しています。本誌をはじめ、会報誌「千曲の友」各号の公開も行っております。

・らるりんたす 公式 Twitter(@Lalulintas_ck)

らるりんたす全般に関する最新の情報はこちらをご覧ください。公式ブログや、一部メンバーの個人コンテンツの更新情報も投稿しています。また弊会コンテンツ「全国バスデータベース」に関しては @bus_database で投稿しております。

・らるりんすた(公式 Instagram)

・らるりんたす 公式 LINE

これらは現在試験運用中です。活用法を模索中ですが、もしよければ登録してみてください。